

## 青春エチュード!

### 一 風紀委員の彼女

### — 咲夜 —

学校へと向かう道すがら、私と同じ制服に身を包んだ子たちをぼんやりと眺めながら、そつとあくびをかみ殺した。

ふぁ……と、うっかり漏れ出てしまいそうな吐息を慌てて手で隠す。

「夜更かしし過ぎたわね……。お嬢様はちゃんと起きられたかしら……」  
現在住まわせてもらっているスカーレット家の姉妹の上の方を思い出す。レミリアという名の彼女は私より年下に見え、学年どころか校舎一つ下なのではないかと思えるほど可愛らしい子なのだ。あんまり可愛いのでつい子供扱いしてしまうのだけれど、それをすると怒られる。機嫌を損ねてもホームステイしづらくなるので普段は気をつけている。もっとも、「さつさとウチの子になれ」と言われているくらい関係は良好なので無用の心配かもしれないけれど。

そんな家庭内の事情はさておき、昨晩は少しばかりはしゃぎすぎってしまった。

私が学校の図書室で借りてきた料理の本を読んでいるところへお嬢様が現れ、今度あれが食べたいこれが食べたい、これは難しいあれは簡単だ、などと盛り上がってしまったのだ。

気づいた時には時計の針は二時を回っていた。

一日や二日、私としては睡眠時間が減つてもたいして苦でもないのだけれど、お嬢様はその辺りが弱い。

後で行かせるから先に行けと家の人に半ば強引に一人で登校させられることになったのだけれど、本当に後から来るのだろうか。

「ふ、あ……おっと。なんだか今日はちょっと眠気がすごいわね……。授業中気をつけないと」

ひとまずお嬢様の事は心配していても仕方がない。きちんと登校できることを祈っていよう。しばらくして、静かな朝の空気が徐々に騒がしくなってきた。

目線を前方に向けると、横に広く取られた校門が次々と生徒を受け入れている。その脇に、一人の少女がぬぼーっと立っていた。

この学校は風紀委員が毎朝校門のところで生徒の身だしなみ等をチェックするようになっていたのだけれど、今時よくもまあそんな制度が生きているなと思う。その制度にきちんと従っている生徒も生徒で純粋なんだか単純なんだか。そもそも生徒が実施している時点で他の生徒に対して大きな影響力や拘束力は無い。有名無実とまでは言わないけれど、効果的な制度とは言えないと思う。

その微妙な制度に愚直に従う少女には見覚えがある。クラスメイトの紅美鈴だ。

あ、またあくびした。

私のように口許を隠すこともせず、リンゴが丸ごと入るのではと思うほどの大あくび。美しくない。

同じクラスに居ながら、彼女に関してはよく分からないと言った方が正しい。

女子にはよくあることなのだけれど、この新学期が始まって間もない時期であっても、クラス内で早々にグループを作り出す。そんな習慣というか性質が、女子にはある。鬱陶しいことこの上ないのだけれど、その鬱陶しい決まりから唯一難を逃れたのが彼女——紅美鈴なのだ。難を逃れたことでこれから先、別の難題にぶつかったりしないのだろうか、という心配は過剰だろう。

登校しても授業中寝てばかりだったせいでもグループに所属し損ねた彼女はしかし、孤立するというよりは悠々自適に過ごしているように見えた。彼女自身もあまりそういうことを気にしていないのだろう。

「おはようございます」

のほほんの間延びした彼女の声が届いてくる。

「おはようございます。あ、その髪型いいですねー」

おい。そいつは注意しろ。明らかに校則違反だろう。整髪料でガチガチに固めた二本の角のよような髪だったぞ。

「おはよーございふあーす」

「おはよう。ちゃんと仕事したら？」

「えへへ。これは失礼。咲夜さんはいつも身だしなみもしっかりしてますねー」

「別に、これが普通のはずでしょ？」

「普通というのは案外難しいものですよ」

「なに悟ったようなこと言ってるの？」

「ふえつつふえつつ。あつ、おはよーございまあす。その髪の色可愛いですよー」

だから！ 明らかに染めてるでしょうが！

この学校は留学生も多く、色んな国籍の人がいるから髪や肌、目の色が違うのはいっぱいいるけれど、今のは明らかに日本人だったでしょうが！

そんなに簡単に通して良いのか、と風紀委員の決まりを疑う。本来であれば門番として選別する側でしょうが。

そこまで考えて、そういえば自分でさつき思ったではないか。

あまり機能していない制度だって。

だったら別にいいのか。こうして美鈴がここに立っているのも、本来やる必要はないけれど伝統に従っているだけなのかもしれない。

次々と通り抜けて行く生徒たちに挨拶をしている彼女の横顔を見て、そんな形ばかりの制度

のために朝から大変ね、と少々同情の念を覚えながら教室へ向かうことにした。

「あ。咲夜さん」

「ん、なに？」

「咲夜さんが今日見た中で一番ビシッと決まってきましたよ！」

「そう。ありがとう」

「また教室でー」

大きな声で言ってきた彼女に手だけ振って返す。

あまりお世辞は言わないようなタイプに見えるし、いま言われた言葉だけは素直に受け取っておこう。

玄関に入り、下駄箱で上履きを取り出したところではたと思った。

「なんか、普通に名前と呼ばれてたわね……」

まったく違和感を覚えなかったほど自然と。言う方も言われた方も。

今までろくすっぽ会話したこともなかったのに。

けれど、今になって思い返してみても不思議と嫌な感じはしない。

それが彼女のキャラクターなのかもしれない。

彼女はさつき、また教室で、と言った。それは当然のことなのだけれど、その言葉がただ単に同じクラスだからというだけじゃなく、教室でもまたお話ししようね、という意味に取れ

てしまうのは考えすぎだろうか。

まあ、いいか。何せクラスメイトなのだ。そう気張ることもない。今日、機会があったら話しかけてみよう。

ねえ美鈴、と――。

## 二 昼休み

「そうだった。こういうやつだった……」

話しかけてみようかと決めた今朝。だが肝心のその対象は朝のホームルームから昼休みとなった今までひたすら眠り続けていた。

これでは話しかける暇もない。

わざわざ眠り姫を起こしてまで話したい話題があるわけでもない。

だがそんな眠り姫も、とある欲求には勝てなかったようだった。

昼休み突入を告げる長いチャイムの余韻まで終わったと同時に、彼女はガバっと起きあがった。

あまりの唐突ぶりに驚いていると、鞆の中から大きな包みを取り出した。

お弁当だった。

正月の重箱かというくらいに大きい。蓋を開けて見えてきたのは一面の茶色。白や黄色っぽいものも多少あるが、幅を利かせているのは茶色だ。

中華弁当というのだから、市販のものとは違い中身が多彩だった。シューマイや春巻きといったものはよく見かけるけれど、それ以外にもかに玉らしき塊や下手をしたら鞆の中身が大惨事になりかねない麻婆豆腐がかなり大量に入っていた。

お弁当の量としては軽く三人前くらいありそうで、ちよつと引く。

「よくもあんな高カロリーなお弁当を……」

横目でちらちらと彼女のお弁当の中身を気にしながら私も鞆の中から包みを取り出した。

同じ「お弁当」とは思えないほど小さなものだ。

「おう、咲夜ー。一緒に食べようぜー」

「魔理沙……と、霊夢も」

「おーじゃまー」

一人で昼食の準備をしていたところにクラスメイトの霧雨魔理沙と博麗霊夢が来た。

私はこの二人と一緒に行動することが多い。いわゆるクラス内のグループのメンバーなのだが、この二人はなんというか、確かに一緒にいることは多いのだけれど、そういった妙な繋がりには重きを置いていないから付き合ひやすいのだ。とてもざつくとばらんで、あまり遠慮が無く、それだけに後腐れも無さそうな感じ。

「お前さー、いつつもあれじゃん？」

魔理沙の問いかけにアタリを付けて答える。

「昼休みに居ないってこと？」

「そうそう。でさー、それってあれだろ？」

「レミリアお嬢様のところに行ってるってこと？」

「それそれ。だからさー」

「今日くらいは一緒に食べようってことね」

「話が早くて助かるぜ」

うまく話を通じたことに魔理沙はうんうんと頷いている。

「あんたらどうしてそれで会話が繋がるのよ……」

「ん？ 普通だろ？ 霊夢もこんな感じじゃなかったっけ？」

「私はそんな、咲夜の読解力に頼るような会話はしない」

いつも眉間に皺を寄せてそうな霊夢の顔が、心外だとばかりに歪む。

どうでも良いことだけれど、霊夢は不機嫌そうとか、キツめの表情が良く似合う。女子として素直には喜べないだろうけれど、顔立ちが整っていると良くも悪くも印象深くなるのよね。

一気に姦（かしま）しくなった私の席。三人で一つの机を囲んで昼食をとる。

けれども気になるのはやはり二つ隣の中華弁当女のことだ。



時折クラスメイトから話しかけられては、口をもごもごさせながら屈託無く答えている姿はなんとというか、少し懂れる。何事にも囚われていない自由な人のようで。

「そーいや、あいつつていつつも中華弁当だよな」

「家が中華料理屋らしいからね。アレも自分で作ってるみたいよ」

「へえーすげーな。今度あたしにも作ってくれないかな」

私の視線に気づいた魔理沙の疑問に霊夢が答えた。

「そう。彼女、中華料理屋の子だったの。まさかお弁当も自分で作ってるなんてね……」

意外な思いで私の口からもぼろりと声が漏れていた。

「人は見かけによらないよな。いつもぼーっとしてるか寝てるだけなのに」

確かに、と魔理沙の言葉に私も霊夢も納得してしまふ。

「でも、一から全部作ってるわけじゃなくて、余り物を詰めたりもしてるらしいから見た目ほど時間がかかっているわけじゃないらしいわ」

「霊夢、お前よくそんなこと知ってるな」

「この前あんまり美味しそうだったんでお裾分けしてもらったためにちょっと話を聞いてみたのよ」

「うわっ、ずりい。あたしも呼べよ！」

「あんたら他人のお弁当にたかりすぎでしょ」

確かに美味しそうではあるけれど、霊夢も魔理沙も素直というか欲望に忠実というか。分かりやすくていいけれどね。

話題にこそ出て盛り上がったものの、結局は彼女に話しかけられずに昼休みが終わってしまった。

ま、いいか。逃げられるわけでもないのだし。

わいわいとした雰囲気と豊富な話題が咲いた今日の昼食は、心なしかいつもより美味しいものに感じられた。

放課後になり、帰宅のために外履きに履き替える。

途中の短い休み時間で上級生の教室を覗いてみたのだけれど、やはりお嬢様はいなかった。結局今日は自主的なお休みをしたようだ。

校門のところに来ると、朝とは別の風紀委員が帰りの挨拶を投げかけていた。

「さようなら。気を付けて」

とても堅い雰囲気の子で、朝ここに立っていた彼女とは大違い。これが本来の姿なのかもしれないが、私は少しだけ物足りなさみたいなのを感じた。

そもそもあの中華娘は放課後の委員の仕事はしなくていいのか？

些細な疑問が湧いたけれど、きっと委員の中でも持ち回りみたいなのがあるのだろう。

「さようなら」

堅い人相手に私の声も自然と同じトーンになった。

学校を後にして商店街へ向かった。

今日の夕飯の材料を買いにきたのだけれど、献立に悩んでいた。

スカーレット家に住まわせてもらっている手前、家事はなるべく率先してやるようにして、料理は趣味も兼ねているので積極的にやっているのだけれど……。

「うーん、どうしようかしら……」

決め手に欠けている。肉や魚、野菜を手にとっては料理が浮かんではくるのだけれど、だいたい最近作ってしまったか、ピンとこなくて作ろうという気にならない。

いっそお嬢様の大好きなもので固めようかと思ったところふと、出来合いの中華料理のソースのパッケージが目に入る。

「中華、ね……久しぶりに作ってみようかしら」

偶然視界に留まったのも、作ってみようという気分になったのも、昼間の一件が関わっていることはすぐに自覚できた。

人に影響させられたりするの好きではないのだけれど、正直、昼間に彼女のお弁当を見てから気になってしまったのだ。今までは無理矢理考えないようにしていたのに、例えパッ

ケージだけでも見てしまうと、もう脳内ではそれ以外の選択肢が浮かんでこない。

「同じ料理はしゃくだから麻婆茄子にでもしましょう」

秋茄子でもなんでもなく、旬からは外れてしまうけれど致し方ない。これは私の中のちっばけなプライドの問題だった。

そんなプライドの被害をこうむったお嬢様の食事時の一言。

「まあまあね」

左様ですか。

味見をした時、自分でも「まあまあ」だとは思った。決して「美味しい」とは思わなかった。きつと、彼女のお弁当は美味しいのだろう。

自分で作っているというお弁当。中華料理屋の娘なのだから当然かもしれないけれど。

それでも、私の心はなんとなく収まりが悪かった。

### 三 お弁当

翌日。二つ隣の子は相変わらず授業中は寝通しだった。

ちよつと疑問に思つて他の知り合いの風紀委員に聞いたところ、この眠り姫さんは朝の仕事

をやっているから放課後の委員会の仕事は免除されているらしい。

そこには放課後はお店の手伝いがあるからという事情もあるのだらうけれど、一番の理由はもっと別のところだ。

学生というのはいち朝が弱い。そして、例え朝に強い人でも部活動でもなければ進んで早朝に学校に来ようとは思わないものだ。

本人の希望と他の委員の子との兼ね合いがうまく両立しているようなのだけれど、そのせいで授業中ずっと寝っぱなしというのは、風紀を預かる委員会として見過ごして良いのだろうか。そこに疑問を持つのは私だけではない。

ほら、青娥先生が怒ってる。笑っているけれど、あれは怒っている。

「紅美鈴ちゃん？」

結婚してる人特有のというか、人妻ならではの遠慮の無さ、みたいなものが節々に出て来る人だ。青娥先生は普段温厚なせいで怒った時がとても恐れられている。

あ、自分の髪の毛から簪（かんざし）を抜いた。

いえ、いくら遠慮が無いと言ってもまさかね……。

「ホウワ……」

「おはよう。死後硬直で黒板しか見られない体にしてあげましようか？」

ああ……本当にやったわ、青娥先生。

好戦的な校風なせいで大目に見られているけれど、あれ他の学校に行ったら体罰で訴えられるわよ……。

寝る相手は選びなさいと心の中で彼女に訴えた。

涙目で直立している様子からどれだけ痛かったのだと、心中察する。もちろん、直接言っつてやる義理もないし、言うつもりも無いけれど。

昼休みになり、今日は隣のクラスの東風谷早苗が来た。

妙な縁で知り合い、以来、微妙な距離の付き合いを続けているのだけれど、早苗の中ではきつと、もうかなり仲良しさんという認識なのだろう。言葉の端々からは遠慮というものが欠けている。

もつとも、そんなものは知り合つて五分後には消え去っていたのだけれど。

「今日は霊夢も魔理沙も居ないから静かに食べたかったのに……」

お嬢様は今日は友人のパチュリーさんと一緒にランチらしく、不在だった。

教室に戻つて魔理沙たちが居ないのを確認してから、教室の隅でそつとお弁当を広げたところで早苗が来たということだ。

「あつ、咲夜さん今日は中華弁当ですか？」

「ええ。昨日作り過ぎてしまつて。久しぶりだったから分量をうまく調節できなかつたのよ

ね」

「へえーへえーへえー。美味しそうですね！」

「言ったでしょ。久しぶりだったから自信作では無いのよ。だからこうやってお弁当にして自己処理してるの」

「そうなんですか？ 見た目は美味しそうなのに……」

「冷めた中華なんてそれほど美味しくないわよ」

きらきらとした目で見つめてくる早苗には悪いけれど、このお弁当はシユウマイの一つだつてやるつもりはない。

意地悪とかそういうのではなくて、宣言通りそもそも自信作ではないし、冷めてしまつているので余計に、だ。

中華は油を大量に使うし、温度が大切な料理でもある。

パリパリカラツとした料理も多いし、炒め物も時間が経てば油が広がってくる。その油も時間が経ったり冷えたりすると白く固まってしまふし、およそお弁当にするには難しい料理が多いのだ。

そんな、失敗寸前のものを誰が好き好んで食べさせるものか。

——でも。彼女のお弁当も冷えているはずなのに、そんなネガティブな印象はない。

この違いはなんなのだろうと思ひ、そつと隣を見る。

そのタイミングで、携帯電話の着信音が響いた。

一瞬、自分のものかと思つたけれど、音から自分のものではないとすぐに分かった。自分の鞆に落とした視線がすぐに音源に向かう。

いや、再び向いたと言ふべきか。

着信のあつた携帯の持ち主は今まさに見ようとしていた中華弁当の君だった。

いや、なんだ中華弁当の君つて。私の中ではもう既に美味しそうな中華弁当というイメージで固定されてしまつているため、他に適当な比喩が浮かんでこない。

ともあれ、彼女はいそいそと慌てたようにして電話に出た。

なんとなく気になつてぼうつと眺めていたのだけれど、通話先に答える彼女の声はとても低いトーンだった。残念そうな、微妙に落ち込んだ声。

無理矢理、という単語も聞こえた。なんだか不穏な単語だ。

必死な様子で電話に応じながらきよきよと辺りを——教室中を見回している。

その視線が私と合つた。私も彼女の方を見ていたのだから、視線が合うのは時間の問題だったのだろうけれど、だったらなぜ先に早苗の方を向かなかつたのか。早苗だつて気になつて彼女の方を見て——

「つて、なにしてるのよっ」

「んぐんぐ、ほれ、おいふいでふね、しゃくやしちゃん」



「勝手におかず取らないですよ！」

「んぐ……ふは。分かりましたわかりました。それでは私のたこさんあげますから。女子高生は燃費悪いですからね、仕方ないですよね」

「違<sup>う</sup>！」

不出来だから他人に食べられるのは嫌だったのに。なにを勘違いして。これじゃあまるで私が、量が減るから怒ったみたいじゃない。

勘違い続行中の早苗は可愛らしい自分のお弁当の中からひよいと一つ、たこさんウィンナーを移動させてきた。だから違<sup>う</sup>っていうの。

……まあくれるのならもうけれど。

って、そうだ。彼女のことだった。

私が早苗とばかなやりとりをしている間に、彼女はすぐ傍まできていた。

長身から降りた影が机の上を横断している。

見上げる私と早苗をよそに、彼女は視線を落としている。それは、私や早苗相手ではなくて、今ここに置かれているお弁当——それも私のものへ、だった。

「な、なに？」

お弁当の出来を見られるのが恥ずかしく感じて、外敵から守るようになしてお弁当を両手ですつちりと掴んだ。

「……なんとかなるかも」

「え？ なに？」

ぼそりと呟いた声は私にはよく聞こえなかった。

「ちよいと失礼」

「へ……？ あつ、ちよつと！」

早苗だけでなく、こいつも私のおかずを！

連れ去られたシュウマイを追って彼女の口許を見る。

その口がしばらくもごもごと動いていたかと思つたが、不意に小さな弧を描いた。

「うん！」

「いや、うんじゃない。ひとのおかず勝手に食べておいてなに一人で納得してるのよ」

私の抗議など聞いていないようで、彼女は電話を取り出した。

「さっきの件、いけるかも」

通話が繋がりっぱなしだったらしいが、彼女のその一言でふつりと切れた音がした。

電話をしまうのももどかしいのか、それを握りしめたまま、彼女は顔を輝かせ、私の手を握

り、そして――

「咲夜さん。バイトをしましょう！」

なんてことをのたまつた。

